ソーシャル・サポートが母親の育児ストレスに与える影響
－効果量による母子家庭における祖父母のサポートの検討－

○　帝京学園短期大学　　野澤義隆（7496）

［キーワード］　効果量、育児ストレス、ソーシャル・サポート

１．研 究 目 的

母親の育児ストレス軽減の方策として，ソーシャル・サポートが注目され，サポート内容やサポート源に関する研究が行われている．しかし，母子家庭を対象とした研究の蓄積は少ない．本研究は，母子家庭の母親を対象に，育児ストレスを軽減させるためのサポート内容の影響を検討すること，祖父母からの知覚されたサポートの有無が，サポート内容や育児ストレスの程度に差が生じるかを検討することを目的とした．

２．研究の視点および方法

本研究は,A 県の保育所に通う 0～6 才児の母親計 1,197 名を対象に質問紙調査を行った．質問紙は，2008 年 9 月に各保育所の責任者を通じて配布した．

回収数は 945 件(回収率 78.9%)，回収した質問紙のうち，母子家庭と回答のあった 83 件を分析の対象とした．質問紙は，吉田(2004)の 19 項目をソーシャル・サポート尺度として使用し，また，初塚・石田(1996)の 27 項目を育児ストレス尺度として使用した．両尺度とも，4 件法で回答を求めた．なお，逆転項目は点数を修正した．

研究方法は，まず，ソーシャル・サポート尺度および育児ストレス尺度の因子構造を確認するため，主因子法による因子分析を行った．次に，因子分析で抽出された育児ストレス因子に対するソーシャル・サポート因子の影響を確認するため，重回帰分析を行った．次に，母親の重要なサポート源として夫や祖父母が示唆されているが（加藤ら 1998：宋ら 2004），母子家庭は夫からのサポートが期待できないことから，重要なサポート源として祖父母の存在が考えられる．そのため，祖父母に焦点を当て，祖父母からの知覚されたサポートの有無によるサポート内容や育児ストレスの程度の差を検討するため，ｔ検定を行った．次に，ｔ検定で有意差が見られた因子に対して効果量を用い，祖父母による知覚されたサポートの影響の大きさを検討するために，Cohen の d を算出した．なお，Cohen の d は以下の式によって求めた(Cohen 1988；南風原 2002)．

$$d = \frac{M_1 - M_2}{\sqrt{\dfrac{n_1 s_1^2 + n_2 s_2^2}{n_1 + n_2 - 2}}}$$

３．倫理的配慮

本研究は，日本社会福祉学会研究倫理指針に配慮し，調査対象者に研究の目的及び倫理的配慮を文書で説明した．質問紙は，調査対象者が特定されないよう記入後は対象者が封筒に入れて封をした上で回収した．統計処理を行う際には，施設名，調査対象者が特定されないよう集計，入力した．

４．研 究 結 果

ソーシャル・サポート尺度および育児ストレス尺度の天井効果，床効果を確認した後，主因子法による因子分析を行った．因子数の決定は，カイザー・ガットマン基準及びスクリー法の解釈により決定した．因子の回転は，Promax 法を行った．結果，ソーシャル・サポート尺度は，「情緒的サポート」，「道具的サポート」の 2 因子が抽出された．育児ストレス尺度は，「育児負担感」，「育児不安感」，「時間のなさ」が抽出された．なお，各因子のα係数は，情緒的サポートは 0.95，道具的サポートは 0.78，育児負担感は 0.88，育児不安感は 0.78，時間のなさは 0.72 であり，内的整合性には問題がないと判断された．

次に，ソーシャル・サポートが母親の育児ストレスに与える影響を検討するため，情緒的サポートおよび道具的サポートを独立変数，育児負担感，育児不安感，時間のなさを従属変数とした重回帰分析を行った．結果，道具的サポートから育児負担感に対する偏回帰係数に有意傾向が見られた（R^2=.058，p<.10；β=-.236，p<.10）．また，情緒的サポートから育児不安感に対する偏回帰係数が有意であった（R^2=.065, p<.10；β=-.242，p<.05）．すなわち，母親の育児負担感軽減には道具的サポートが，育児不安感軽減には情緒的サポートが影響を与えるといえる．

次に，祖父母からの知覚されたサポートの有無を独立変数として，ソーシャル・サポート尺度と育児ストレス尺度の下位尺度得点について t 検定を行った．結果，道具的サポートは，祖父母からの知覚されたサポートがない母親より，知覚されたサポートがある母親の方が有意に高い得点を示した（t(81)=4.22，p<.01）．また，育児不安感は，祖父母からの知覚されたサポートがない母親より，知覚されたサポートがある母親の方が高い得点を示す有意傾向が見られた（t(81)=1.76，p<.10）．t 検定結果から，道具的サポート，育児不安感の効果量を検討するために，Cohen の d を算出した．結果，Cohen(1988)による効果量解釈の目安は，0.2～0.5 は小さい効果，0.5～0.8 は中程度の効果，0.8 以上は大きい効果とされており，道具的サポートは大きい効果（d=1.22），育児不安感は中程度の効果(d=0.51)であると解釈された．すなわち，祖父母からの知覚されたサポートは，道具的サポートを非常に増やす効果があるが，同時に育児不安感を増大させるといえる．

以上のことから，母子家庭の母親へのソーシャル・サポートは，育児ストレス軽減に影響を与えているが，祖父母からの知覚されたサポートがあることは道具的サポート量を増加させるものの，直接的に育児ストレスを軽減しているとは言えないことが示唆された．